

この町で、この地で笑って老いたい ～そのために今すべきこと～



【まち協だより】

令和6年3月号

発行：山上まちづくりの会事務局

電話(FAX) 82-0933

みかみしげひこ

●三上成彦(日南町茶屋出身) イラスト展開催決定



三上成彦さん 自画像

茶屋出身のイラストレーター三上成彦さん(ペンネーム かみなりひこぞう 雷彦三)のイラスト展が4月26日から5月12日まで日南町美術館で開催されます。三上さんは昭和21年(1946年)茶屋生まれ、山上小学校、山上中学校、日野産業高校と18歳まで地元で学び上京。警視庁入庁後、東京都立川署勤務。警視庁在職中からイラスト入り広報紙を自主制作したりし、たくさんのイラストを書きためてこられました。今回のイラスト展は、昭和40年高校卒業までの懐かしい思い出の作品を展示されます。

三上成彦さんのイラスト展によせて

作品との出会い

成彦さんの弟である真司君とは同級生で、「兄が書き留めた作品を一冊の本にまとめたので、良かったら町おこしにでも使えないか」と、『鬼語録』と記された本を手にしたのが作品との出会いです。

怖い者の象徴として描かれる鬼が、愛嬌あふれる表情に温かな文字で諺(ことわざ)などを配したイラストに感動し、早速観光協会に作者の想いを添えて夢を託しました。

イラスト展開催のいきさつ

お母さんの法事で帰省された折、15歳まで過ごした当時の風景、遊び、生活などを望郷に駆られながら、ほのぼのとした独特なタッチで描写された数多くの作品に触れ、再び衝撃を受けました。

個展でも開けないものかと『鬼語録』も持参して美術館を訪れ、浅田学芸員に相談したところ、「是非やりましょう」とすぐに興味を示され、この度開催の運びとなりました。

タイムスリップした情景と、自分を見つめなおす作品となっております。是非足をお運び下さい。

記 近藤仁志



「ピッカピッカ」 三上成彦作

●令和6年度の交流活性化交付金事業について

山上まちづくりの会では、交流活性化交付金を申請して栗まんじゅう器具を買い、盆踊りや文化祭などで運用していく予定です。この事業の目的は、栗まんじゅうを通して地域の人々が交流し、繋がることです。また、令和5年度に実施した草刈りボランティア『山上ちょこっと応援隊』事業は令和6年度も継続予定です。

七里離れた、根雨の高等小学校へ

どうにか人並みにできるといふのは
絵を描くこととすわり相撲だけで、並
外れの内気でぐずで学校嫌いの岩雄

も、両親の励ましと菊太郎の友情に助
けられて、それでもなんとか尋常小学
校をしまうことができました。当時の
尋常小学校は四年生まででしたので、
両親は岩雄が将来は家をついで神主に
ならなければいけないことを考えて、
高等小学校に進ませることにしまし
た。

そのころ日野郡では高等小学校は根
雨というところにただ一校あるだけ
でした。

「山上村からの二人目の進学者なのだ
から、他の村の出身の生徒に負けない
ように頑張らなければいけない。」とい
う、父、義彦の言葉に励まされ、明治
十八年十二才の岩雄は米を入れた柳行
李（柳の枝で作った整理用の箱）を背
負って、根雨までの七里（約二十八キ

ロメートル）の道を歩いて行きました。
た。

あっちの村やこっちの村から、一
人、二人と集まってきた生徒です。み
んな、さすがに頑張り屋ばかりです。
尋常小学校をぐずで通した岩雄も父母
のもとを離れた寄宿舎生活の中では、



今までのようにのらりくらりばかりは
しておれなかったようです。

そして高等小学校では英語の学習な
どもあって、本当に学校らしいこの学
校の雰囲気は岩雄は気に入る、少しづ
つ力を発揮しはじめました。

小さい時からものを書いたり、観察
したり、物事にじっと取り組んだりす
ることは得意だった岩雄です。もとも
と学科の勉強はそれほど嫌いではな
かったのです。先生はそうした岩雄を認
めて、ほめてくれるので、いよいよ自
信をもって努力し、成績はさらによく
なりました。

それは尋常小学校のころの、毎日、
菊太郎に引張られるようにして渋々
登校していたころのぐずぐずした岩雄
を知っているものには驚きでした。特
に、父や母の喜びは大きく、これなら
将来、神主をつぐこともできるだろう
と、今までの心配がようやく消える思
いでした。

※明治十年代、当時は相撲や力比べのこ
とを「角力（かくりよく）」とも言った。